



江戸の危機を救った下町の英雄

“鬼平” 長谷川平蔵宣以の生涯 (下)

佐々木 明(元朝日新聞記者、獨協医大講師)

宣以は父親譲りの現場主義を重視した。また、目撃者や関係者からの聞き込みをする一方、容疑者の張りこみや尾行を徹底した。前任者たちの拷問で自供させる手法には目もくれず、足を使った地道な捜査を優先した。当時は犯人の召し捕りばかりか裁判までまかされていた。直属の部下は精鋭とはいえ、与力、同心四十人余り。とても、手が足りない。

彼は自分が取り調べた軽犯罪者や更正したかつての犯罪者を厳選し、自腹を切つて目明かしや岡っ引きに登用。密行や張りこみをさせた。禁止行為であったが、自分の責任で部下として使いこなした。蛇の道は蛇。毒は毒をもって制すべし。放蕩時代に学んだ体験を犯罪捜査に活用して効果をあげたのである。

当時、江戸は鎖国の最中で百万を超える大都市だった。が、地震、火山の噴火、風水害、飢饉、暴動や一揆が続発し、犯罪が多発した。生活に迫られた農民達が各地から押し寄せた。幕府は無頼、無頼の徒の犯罪を恐れていた。宣以は役宅のそばにあった無宿人收容所の入所者が脱走や犯罪を繰り返していることに心を痛めていた。「罪を憎んで人を憎まず。軽犯罪者には社会復帰の道がある」と老

中、松平定信に授産機能をもつた「人足寄場」の設置を提案した。

幕府の用地である江戸湾入り口の石川島に目をつけ、逃亡の心配のない島で職業訓練をさせるという画期的なアイデアだった。



石川島の人足寄場地図
「復元・江戸情報地図」(朝日新聞社)より

幕府の財政は逼迫していた。

やむなく、五百両の建設費と米五百俵で始めた。寛政二年(1790年)、45歳のことだ。火盗改と人足寄場を兼務した。予算不足を補うための窮余の策として自ら銭相場(株)に手を染めた。また、役宅の一角を有料で地元民に貸したりした。ともに違法行為だったが、切腹を覚悟の行為だった。銭相場は当り予想外の収益が職業訓練の設備に投入できたのである。

島内に小屋を作り、大工、建具、指物、草履づくりなど、技術を主力にした。労賃を蓄えさせ、島での労働で得た金で社会復帰をさせた。

二十二人で始まった寄場は、のちに、木製の入歯から鉄砲まで製造できるようになり、天保年間には六百人を超えた。寄場での紙すきは「島紙」と呼ばれ市中で人気を集めた。寄場は今日の府中刑務所につながる。

警察、検察の関係者ばかりか日本の自由刑、保安処分の原点として世界の矯正関係者の間で「Heizo Hasegawa」の名は刑務所のパイオニアとして注目されている。

江戸後期の混乱期を度胸と知恵で乗りきった宣以は激務がたり、寛政七年(1795)四月、50歳で病に倒れる。将軍・家斉は殿中の秘薬、瓊玉膏を部下に届けさせたが、5月10日(旧暦6月26日)死去した。父親同様、殉職だった。将軍が朝鮮通信使からの献上品である貴重薬を届けさせていることは稀有なことである。

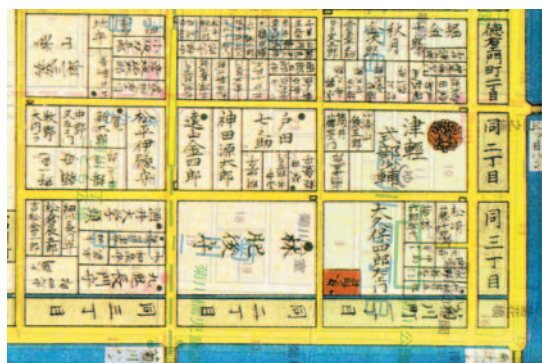
江戸の随筆『わすれのこり』は宣以について「賞罰正しく、慈悲心深く、頓知の裁き多し。人々今の大岡殿(名奉行、大岡越前守忠相)と称し、本所の平蔵さまとして世に隠れなし」とその働きぶりを賞賛している。

菩提寺の戒行寺(新宿区須賀町)には没年当時の住職が書いた



戒行寺境内の供養碑と筆者

た戒名「海雲院殿光遠日耀居士」が残されている。墓は戦災でなくなり、境内には「火付盗賊改方、長谷川平蔵宣以供養乃碑」が建つ。命日の6月26日前後の日曜に記念の集いが寺の主催で開かれ、役宅跡とならびファンのか来訪が多い。菊川町の役宅は、三代目平蔵の息子、宣義の代に江戸町奉行、遠山金四郎に引継がれているのも実に興味深いことである。



遠山金四郎屋敷跡は現在の菊川3-16(菊川駅前)

タイトル右上は長谷川家の家紋「左三藤巴」